

## 生徒－教師ペアでのメール交換による美術鑑賞対話

### Art Appreciation Dialogues by Email Exchange of Student-Teacher Pairs

佐藤 哲夫・池田 義広\*・藤本 優希\*\*

#### I. はじめに

これまでも、生徒同士のペアでの対話による鑑賞を試みて来た。<sup>1)</sup> 一人で鑑賞することと集団で鑑賞することの中間にあって、ペアでの対話による鑑賞は、自分の作品に対する見方と他者のそれとを対話によって明確化することが可能になる。一つは、ペアの場合自分の考えを相手に言葉で伝えようとより努力するということがある。もう一つの理由は、他者である相手の作品の捉え方は、自分の考えとどう異なりどう共通するかということに注意が向かうからである。自分と相手が1対1で対話することは、人間的な興味と他者に対するリスペクトに由来する倫理的責任を際立たせ、こうした過程を促進するのである。

これまでのペア対話による研究は、当然の如くに生徒同士のペアで行ってきたが、そこには対話は水平の関係でこそ良く成立するものであり、上下の垂直の関係では難しいという判断があった。そもそも、近年指導者ではなくファシリテーターという言葉が好まれているのも、この見方の表れと思われる。しかし、考えてみればどんな二者間の関係も、水平か垂直のどちらかの関係に完全に収まってしまうことはないことがわかる。同じ学級の仲のよい生徒ペアも、時によりまた話題や状況により、水平は一方に傾いたり他方に傾いたりし、静止することはない。生徒-教師ペアも、完全な垂直的上下関係というわけではない。権威的威圧を感じさせることもあれば仲間同士のような気安さを感じさせることもある。

これまでのやり方では、自己は対話の観察者だったのが、生徒と1対1で自らが対話する場合には、当事者になることであり、観察者であると同時に被観察者にもなることを意味する。これは、方法論的には客観性を脅かすものであると見做すべきかもしれないが、対話の内側に身を置き、そこから直接相手生徒に向き合える利点と魅力がある。

さらに今回は、メール交換という形式で対話を行った。このことの効果については、池田が<ICTを用いた対話による鑑賞の成果と課題>で触れているので省略する。また、今回の実践の具体的な実施内容に関しては、藤本が巻末にまとめてあるのでそちらを参照されたい。

#### II. 生徒-教師ペアによる鑑賞対話

##### 1. 3年生生徒Aと佐藤との対話（バスキア『落書き』）

生徒A①一つ一つバラバラな落書きさだけど、何か統一感があってごちゃごちゃしてないなと思いました。ですが、ところどころ「なんでこれ描いたの?」「これってどういう意味?」となるところがあります。そこを自分なりに解釈して作者のメッセージを読み取りました。今回自分なりに読み取った一つとして、作品の中の人の色がねずみ色、赤、透明?すけていているようなものなど色々あって、そこには、人の心の中の感情だけではなく、外界から受けるストレスやうれしいことなどが混ざり合っているのを色を用いて、いろんな

2022.10.24 受理

\* 新潟大学附属長岡中学校

\*\* 新潟大学現代社会文化研究科

表現で表していると思いました。

**佐藤①** Aさん、感想ありがとうございます。これは、鑑賞用に用意した複製画ではなく、元の全体を示す参考画像についての感想ですね。こっちについて話したくなる気持ちは、私も同じなのでよく分かります。しかし、申し訳ありませんが、これはあくまで参考ということで、今回は用意できたこの部分複製画の方を中心に対話することにしましょう。

「人の心の中の感情だけではなく、外界から受けるストレスやうれしいことなどが混ざり合っているのを・・・」というのは、なるほどと感心させられました。特に「外界から受けるストレス」、過剰な刺激ということは私も感じます。

描かれている人は、如何なる意味でも、これまで絵画に描かれてきたような伝統的な肖像画とは違いますよね。人格や個性、内面性といったもので特徴づけられるような人の表現ではなく、ストレスの暴力に晒されて、人間的な感情が破壊されてしまったような、しかし破壊されたまま死なずに生きているような。これが、現代の人間ということでしょうか？



図2 バスキア『ペリシテ人』1982



図1<sup>2)</sup> バスキア『ペリシテ人』(部分) 1982

#### <対話①の分析と考察>

本実践の鑑賞は、額装した複製画を用いて行ったが、メールを書く時の利便性を考えて、電子画像が参照できるようにした。ところがこの絵に限っては、手に入れられた複製画は、元の全体ではなくトリミングされた部分のものであった。そのままだと勘違いするので、同時に作品全体の画像も参考に載せた。そのせいでAさんは、この全体画像を基にした鑑賞を進めようとしているようだった。それで以後は全体画像の方は削除したが、一度目にして得た刺激や印象は、記憶に刻まれ残り続ける。それは、目前のトリミング複製画を見ている時にも影響する。このことは、「鑑賞される対象は何か」ということに関して示唆的である。今日の前にあるものは、「見える」全体としても「見えないものの」部分としても知覚され得る。

本題に戻る。Aさんは、「人の心の中の感情だけではなく、外界から受けるストレスやうれしいことなどが混ざり合っているのを色を用いて、いろんな表現で表していると思いました」と書いてくれた。これは、極めて的確でこの絵の本質的な解釈になっていると感じて嬉しくなった。教師はその気持ちを素直に伝えたいと思った。さらに加えて「あなたは素晴らしいことに気づきましたね。あなたが気づいたことをもっと明確にすればどうということでしょう。現代人の肖像を表現する(できる)ための新しい表現法ということではないですか」という思いを持っての返信を書いた。

**生徒A②** 私と先生と似てる考えで、外界のストレスに心も体もズタボロにされて「この人生きてる？」って心配になるくらいだと私も思います。ですが、人の目を見て優しさを感じました。目の中の色が青と白で暗い色があって、白が強調されて他の過激なところは少し違う雰囲気をかもし出している。私はそこから、過激な社会にどんなに打ちのめされても人間の優しさを忘れないでほしいなと作者は伝えたいんだろうなと思いました。私はこれで全部出し尽くした感じです。教授は他にもっとここに注目したら楽しめるんじゃない？というところはありますか？

**佐藤②** 「目を見て優しさを感じました」と言われると、私にもそのように見えて来るので面白いです。

この絵で注目されるのは、線と色ですね。色(朱色がかった赤と黒)は、血がイメージされますね。無造作に見える線は、人や物の存在を表す線の他に、漫画表現でいう効果線のような、物ではない性質や気持ちなどを表す線が多用されています。この線が、荒々しくスピード感があって面白い。種類も色々あって、全面、線だらけで賑やかです。これが強いエネルギーを発しています。

作者であるバスキアという人は、どんな風にして絵を描いたのだらうと思います。確かなのは、究極の線

を求めてじっくり吟味しながら慎重に引かれた線ではないということですね。凄い速さで、考えるより速く描かれたように見えます。

線、あるいは描き方を巡って、あるいはこんな描き方をするバスキアについて、Aさんはどんなことを思いますか？

#### <対話②の分析と考察>

Aさんは、自分のこの作品の感想を述べ、それは教師にも賛同を得て、対話者同士の間で共感を持って共有された。通常の浅い対話なら、ここで満足して終わりとなるところである。しかしAさんは、対立・反対をこれから述べようとする言葉「ですが」を發し、この絵には「優しさ」のメッセージがあるという。Aさんが優しさを感じるという目の色の話は、全体画像についての感想で、真ん中の人物の目のことを言っているようにも思われる。指摘されれば確かに、真ん中の人物にしる複製画にトリミングされた左の人物にしる、あるいはもう一人の右の人物にしる、漫画風の日や顔の表現からは純朴な人間味と「優しさ」が感じられる。Aさんは、最初に表出した感想に、教師が思いがけず賛同してくれたことで自分の見方に自信が生まれ、それがためにさらに踏み込んだ作品の解釈を提示したのだと思われる。現代の過度なストレスにさらされながらも懸命に生きている人間という物語としての解釈である。

しかし教師は、トリミング複製画に限定して鑑賞しようと提案していたので、このやりとりの時点ではAさんもそうしていると決めつけていて、Aさんの「優しさ」の指摘は実はそれほど強くは共感しなかった。そのため、人物の目の「優しさ」を重要な要素とする解釈も、この時点では、中学生の安易なヒューマニズム物語志向による独りよがりの解釈であるかのように感じてしまい、心底賛同することはできなかった。

そして「私はこれで全部出し尽くした」というAさんは、今度は自分から教師に対して、さらにこの絵の注目点はあるかを問いかけた。確証はないが、この問いかけは、客観的でより十全な絵の解釈を得るためというよりも、対話の相手を一人の独自の人格を備えた他者として意識した結果としての人間的な興味から発する問いかけであったように感じた。これに対して教師は、まだ話題にされていない色や線の独特な性格についての見方を述べ、そこから今度は画家バスキアについての問いかけに繋げた。

**生徒A③**私は、こういう躍動感のあるバスキアの描き方は斬新でかっこいいと思います。私がこの絵を選んだ理由も他の絵と違うこの絵だけが持っている勢い、美しさに惹きつけられたからです。バスキアはなぜこういう描き方をするのか聞いてみたいです。自分は下絵を完璧にして「この構図ならいい！」と思ってからじゃないと、描き始めません。自分と違うからこそ興味を惹かれたのかもとも思います。

今、卒業作品？みたいな美術部で最後に描く四つ切サイズの絵の制作をしています。この鑑賞をして、今回はちょっと勢いで斬新に描こうかなと思いました。

バスキアはきれいに線を並べるというのではなく、自分の頭の中にできている構図をシュッシュッと描いているんだと思いました。

教授は絵を描くとき、バスキアみたいに描きますか？教えて下さい。

**佐藤③**私は今回、上村松園の美人画について、Bさんともやり取りしています。私には、松園のような超絶的な繊細かつ優美な絵はどう足掻いたとしても描けないですが、バスキアの描き方なら、表面的には真似できるかもしれないと思わせるものがありますね。しかし、実際は無理でしょう。感覚と身体の瞬発力が違いすぎます。バスキアとは性格やタイプも全く異なると思います。私とはあまりに違いすぎるので、そこに惹かれるのだと思います。私はよく、自分とは異なるもの違ったものに強く引きつけられることがあります。逆にそういうものを嫌だとも思うこともあり、その辺よく分からないところなのですが。

バスキアと上村松園は対照的ですが、今回並べた絵ではモンドリアン（黒い線で区切られた水色と灰色の抽象画）とも対照的ですね。モンドリアンは手を動かしているより、瞑想に耽ったり考え込んでいる時間が遙かに長そうです。強いて言えば私はこっちだと思います。

私はもっぱら鑑賞者の視点で見っていますが、Aさんは鑑賞＝制作者として関わっているのが素敵だと思います。

#### <対話③の分析と考察>

Aさんは、バスキアの描き方を「かっこいい」と述べる。そして自分とは違うところに「惹かれたのかも」と言う。ここに来て、対話も硬さがとれて打ち解けた気取りのない言葉で自分を語っている。

教師は、制作者としての質問をされて、普段制作活動をしていない自分は、もっぱら鑑賞者の立場に立っていることに気付かされた。しかしAさんは、授業や部活動では制作をしている。作品の鑑賞も一方で制作と関連させながら行われている。それは、鑑賞のあり方としてより本来的な形であるとも言える。なぜなら、現実には制作を行っていないけれども、ある程度頭の中で制作活動を想像するのであれば、作品の評価や価値は捉えられないからである。表現の巧みに驚き舌を巻くには、その困難さを実感している同種の制作者が最も適しているにしても、制作しない普通の人も賛嘆の声を上げる。それは、その表現の困難さが想像的に追体験されるからである。その想像は実は的外れということも往々にしてあるとしても。

絵の鑑賞で刺激を受け、「今回はちょっと勢いで斬新に描こうかなと思いました」というAさんに、澁刺とした若さの健全さのようなものを感じた。

生徒A④今回鑑賞したことで、パスキアの作品から感じる表情、見ている人に伝えたいこと（メッセージ）が自分自身で鑑賞するときよりたくさん見つけられました。鑑賞は自分がこの絵を見て、「もっとその人、この絵について知るために見落としている部分はないか」「偏った見方になっていないか」というところをお互いに補い合っ、人としての考え方を広げることにつながる良い学習になりました。これからは、もっと学校の鑑賞で意見を出して仲間の意見を聞いていきたいです。教授と鑑賞する機会をいただけて光栄です。ありがとうございました。

#### <対話④の分析と考察>

正しくは対話ではなく、Aさんによる結びの言葉である。今回の対話による鑑賞の評価と意味づけがなされている。一人での鑑賞よりもより多くの観点から絵を見ることができたこと。偏向した見方になっていないかを確認できたこと。そして総じて「良い学習になりました」ということが語られている。

しかしここでの総括の発言は、Aさんが今回の対話によって経験したことを正しく言い表していると言えるのかは疑わしく思われる。つまり、本当に経験した重要なことがあったのだが、それを言語化する段階では、無意識の内に学校で馴染んだ既存の言説の枠組みに沿う形に変形されたのではないかと思われるのである。その枠組みは学校教育における一般的な価値観を表すものであって、対話の価値と目的を、個人の知識・能力を伸ばすための補完的役割に置いている。しかし、対話による鑑賞の価値は別なところにある。確かに、対象である作品についての考えのやり取りは、作品自体の客観的で普遍的な理解を目指して交わされているような記述の形態を取っている。だが本当は、私と作品の関係と対話相手と作品の関係を相互に並べたり交差させたりしながら、他者と共に作品の意味を作っているのである。作品を鑑賞するとは、自分を作品に、作品を自分に接続する(=繋ぐ)ことである。しかし、そのことは不明瞭であり意識されていない。しかし、相手もまた作品に自分を繋いでいる。同じ作品について二人で対話することは、作品鑑賞が、作品と人の関係、関わり方であることを実感を持って強く明瞭に感じさせてくれる。これまでのメールでやり取りされた言葉の表現の質からして、Aさんもこのことに気づいていると思われるのである。自分が感じることを、教師が語ることは、作品についての語りの中で提示されるのだが、それは自分と作品との関係のそれぞれのあり方の交換である。すなわち対話相手が語ることは、作品についての語りであると共に、その人自身についての語りなのである。したがって、対話による「鑑賞の楽しさ」は、鑑賞による「対話の楽しさ」と切り離せない。人と関係を取り結ぶことなくして、作品単独では作品の価値は発揮出来ない。鑑賞を深めることは、作品を鑑賞者との関係において探究することである。

#### 2.2年生生徒Bと佐藤との対話（上村松園『牡丹雪』）

生徒B①雪の描き方が牡丹雪特有のフワフワした感じがよく伝わります。また、後ろの女性が持つ傘に積もっている雪が大量に積もっているのではなく、少し乗っている様子に趣を感じました。手前の女性の少しかがんでいたり、耳が赤くなっている様子から冬の寒さを感じました。

佐藤①降っている雪の表現ですね。本当に軽いふんわりした雪です。「手前の女性の少しかがんでいたり、耳が赤くなっている様子から」。なるほど。傘の柄を持つ手も袖の中ですね。ほんのり「耳が赤くなっている」のに呼応して、背景の画面の下部が薄青くなっていますね。

写実的でありながら、絵全体、お芝居か映画の場面のように、「様式美」を感じます。牡丹雪が降る背景が広く取ってあって、重要性も人物と同じ比重で釣り合っているように見えますね。

「趣を感じました」とありますが、「趣」という言葉が新鮮でした。Bさんは、どんなときに趣を感じますか？趣って何でしょう？

**生徒B②** グーグルで検索すると「趣」とは味わいや面白み、自然にそう感じられる有様のことを指すそうです。傘の上に積もる雪の様子を見てなんの違和感もなくスツと納得することができました。また、よく見ないとわからない程度に控えめに描かれている、積もった雪に美しさと面白みを感じました。私はそういった自然な着飾りすぎない美しさに趣を感じます。

私はこの絵の線の描き方にも美しさを感じます。日本の絵ならではの独特な雰囲気と言いますか、全体的に丸く見えますよね。西洋の絵画は現実をそのまま書き写したような写実的な絵が多いですが、日本の絵画はそこまで写実性を追求しているようには見えません。教授はこの絵のどんなところに日本特有の魅力を感じますか？



図3 植村松園『牡丹雪』1944

**佐藤②** 前回触れたことに関係しますが、余白をととても大事にしていることですね。この余白の重視というのは、「控えめに描かれている」「自然な着飾りすぎない美しさ」というのともどこかで繋がっているような気がします。印象で言うと、人間中心で自己主張の西洋に対し、自然や世間の中で謙虚に生きようとしている人に共感を覚える日本人ということでしょうか。

写実の違いも確かにありますね。これも、荒っぽく言うと、比率寸法の正確さと精緻さを追求する自然主義的な西洋の絵に対して、日本画は鋭い観察と修練をこれ見よがしに差し出すような野暮なことは避け、美的な基準を事実の基準よりも重視しているということでしょうか。

私がBさんに聞いてみたいのは、作者の上村松園はどのような女性だったと思いますか、ということです。

**生徒B③** 上村松園の美人画からは気品、凛々しさがありながら優艶さも感じさせる優美な作品が多いです。私は、作品の雰囲気は作者の雰囲気に似ると思っています。なので、上村松園は上品で凛々しくしとやかさも兼ね備えた美しい人格の持ち主だと思います。お嬢様のような人格ですね。教授は作品の雰囲気は作者の雰囲気に似るという考えについてどう思いますか？

**佐藤③** 上村松園は、上品でしとやかでありながら、凛々しくもあった人なのではないかということですね。

作品と作者の雰囲気が似るのは、そうあって欲しいし、私は似ていると信じています。

作品と作者は別で混同すべきではないという意見もありますが、作品は、作者の人となりについて何がしかの真実を語っていると思います。人は、直接会って話せば自分のことや思いをありのままに伝えられるかといえ、そんなに単純じゃないですよ。一方、作者のことはよく知らなくても、作品にじっくり親しむことを通して、その人を身近に感じる気持ちになることはあります。私にとっては、鑑賞の喜びは、人との深いコミュニケーションの満足に関わっているような気がします。

Bさんが問うたのは作品と作者の雰囲気が似るかという話でしたが、その作品が好きな鑑賞者は、作品あるいは作者とどこか似ているのか、ということはどうでしょうか。

**生徒B④** 鑑賞者は作者と好み、感性が似ていると思います。作者は出す作品を良いものだと思って世に送り出すと思いますし、鑑賞者もそれが良い作品だと感じるからです。ただ、作者の性格などまでは似ないと思います。私も、好きだと思う作品の雰囲気が暗い雰囲気の作品もあれば明るいHappy!な雰囲気の作品もあるからです。それに友達をつくる時、おんなじような性格の人とばかりではないでしょう。友達をつくるのと同じように、鑑賞者も色々な雰囲気の作品を気にいると思います。

#### <生徒Bとの対話の分析と考察>

今回、用意した複製画から3人の生徒が上村松園の『牡丹雪』を選んだのには少し驚いた。日本の絵はこの一枚のみであったのだが、女子生徒は日本画を好む傾向があるということなのかもしれない。しかし、日本画の清潔感が漂うこの絵自体の魅力を感じた生徒が多かったということだろう。Bさんのメールからは、この絵をととても好んでいる様子が伝わってくる。「牡丹雪特有のフワフワした感じ」や「耳が赤くなってい

る様子」が気に入ってそこに「趣」を見出している。この絵の主題は、女性でも牡丹雪でもなく、これらの情景が醸し出している趣である。それは、多くの日本人が持つ体験からそれとして感覚される「あの」といった雰囲気である。Bさんはまた、西洋絵画と比較して、教師の意見も尋ねている。教師は、Bさんの話で共感するところを伝え、そこに関連を持たせながら話題を拡げる方向で投げかけるように努めたが、Bさんも、この対話法を理解し倣っているように思われる。しかし、このことは自由な対話を阻害するというよりも、安心して言いたいことを言える手立てとして機能していたようである。

### 3.1 年生生徒Cと池田との対話（ピエト・モンドリアン『構成番号VI;構成9;青いファサード』）

生徒Cは、ピエト・モンドリアン『構成番号VI;構成9;青いファサード』を鑑賞する作品として選択した。対話中にもあるが、生徒Cは、このような抽象的な表現には初めて出会ったと述べている。生徒本人としては見慣れない表現だが、シンプルであるが故に新鮮味を感じたことが選択の理由である。最初は、「色々な見方ができる」「色の統一感がある」という短い感想が述べられた。作品の魅力を感じつつも、それを言語化していくことはすぐにはできなかったようであるが、対話が進む中で作品についての自身の見方・考え方を言語としてアウトプットしていき、深い鑑賞活動へとつなげている様子分かる。一対一の対話を通して、生徒Cがキーワードとして挙げる「色々な見方」や「色の統一感」の全体像が見えてくる。

以下は、生徒Cと池田の対話内容である。

**生徒C①**人によって色々な見方ができる作品だと思いました。また、色の統一感があって綺麗だと思いました。

**池田①**Cさんが言うように、人によって見え方・捉え方が変わる面白い表現ですね。シンプル化されているからこそ、想像が広がるのかもしれませんが。色も統一感があるところがよいですね。部屋の中に飾っておいたら落ち着いた空間を演出してくれそうな絵です。

みんなで鑑賞したときに部員の誰かがつぶやいていましたが、左側に階段か、はしごのような形が見えることから、建物やたくさんの部屋を描いているのかな？と私も感じました。微妙な変化をつけた落ち着いた水色の色調が何とも言えずいい雰囲気をつくっていると思います。Cさんは、どのように見えましたか？(下線a)

**生徒C②**私は、水色の机を並べた部屋を上から見ているように捉えました。あと、手前の茶色い三角も見方を広げるきっかけのように思います。私は扉が開いているように思います。はしごのような部分も階段のように見ることもできると思います。また、青系の色で統一感を出すことによって、見方が変わってくるのではないかと考えました。このような点を踏まえて色々なところから想像を広げることができる作品だと思います。

**池田②**なるほど、視点を変えて建物の間取り図のように見たのですね。面白い視点です。そう見ると三角の部分はドアが開いているようですし、階段は地下か2階に続いているようにも想像されます。

何かの対象をできるだけシンプルに、抽象化して表すこんな方向性の表現もありだなと私は思います。無駄なものが削ぎ落とされて、形や色の美しさだけを残したような表現だと感じます。鑑賞する人の楽しみ方もそれぞれの人の感性に沿って多様になりそうですね。

今回のモンドリアンの表現の仕方は、Cさんが好きな絵の描き方やこれから目指す方向と重なる部分はあるのでしょうか。それとも初めて出会う表現で新鮮だったかな？(下線b)

**生徒C③**私は、このようなシンプルな絵を初めてみたので、とても新鮮に感じられました。普段は、描くときも見るときも風景画やアニメーションのようなイラストが多かったので、私にとっては最初の鑑賞のときにシンプルでとても印象深かったです。この絵から参考にしたいことは、色づかいです。私は、基本自分が描いた絵に色を塗りません。なので、いざ色を塗ろうとなったときには、使う色に困ってしまいます。そして、合わない色で塗ってしまうことがたくさんありました。ですが、この絵は色の統一感があり、とても綺麗に感じられる絵だと私は思いました。これから、絵のコンクールが立て続けにあるので、その時に参考



図4 ピエト・モンドリアン  
『構成番号VI;構成9;青いファサード』1914

にしたいと思います。

**池田③**Cさんは今回のような絵を見て自分なりの想像をいろいろと巡らせながら鑑賞できるのだなあと感じ、もしかしたらこれまで抽象絵画などに触れることがあったのかな?とも思いましたが、初めて出会う表現だったのですね。

「色の統一感」という美しさを感じる要素は表現に生かせそうですね。私も制作をするときに意識をするポイントですが、実は初めてそれを意識したのは私の場合高校生の頃でした。私服の学校で、毎日自分で下手なりに服を選んで行くのですが、あるとき鏡を見たときに上と下の服や靴に共通する色をとところどころ入ると全体の調和が取れてまとまる気がしました。その感覚は絵を描くときにも応用したらわりとしくりくる。そんな体験をしたことがあります。

Cさんは日常の色や形を見る体験の中で、綺麗だなとか、繰り返し見たくなるとか、しくりくる、という感覚を得るときはありますか?(下線c)

**生徒C④**私は、アニメをよく見ますが、その時にも色の統一感があるなと思います。髪の色と服の色が似たような色だったりとか、目の色と髪の色が似ていたりすると綺麗だと思います。また、オッドアイの目にする時の色が両目の色の系統が全く違っても相性がいい色だったりすると結構印象深いです。小学校の頃は母に服を選んでもらっていたし、絵も小学校の終わり頃から描きはじめていたので、色についてはあまりくわしくありませんが、これから色々な絵を描いたり見たりする中で、色についてもっといろいろな知識を取り入れて行けたらいいなと思いました。

#### <生徒Cとの対話の分析と考察>

生徒Cの初めの感想の中に「色々な見方ができる」「色の統一感があって綺麗」という記述があったため、そこをきっかけにして対話を進めると深い鑑賞ができるのではないかと考え、下線a, b, cのような質問を生徒Cに投げ掛けた。

下線aの「Cさんは、どのように見えましたか?」という質問に対しての返答では、生徒Cが住宅の間取り図を見るようにしてこの作品を捉えていることが分かった。これは、他の美術部員や池田が建物を正面から見るようにして作品を捉えていることと視点が90度違い、素直に面白いと感じたことを伝えた。

こちらの質問に対しての反応がよく、また、積極的に作品を読み解こうとする姿勢があったため、鑑賞と表現をつなげるための質問を考え、下線bでは、生徒C自身が日頃好む表現と重なる部分があるのかについて尋ねた。すると、「このようなシンプルな絵を初めてみたので、とても新鮮に感じられました。」との返答があった。また、「この絵から参考にしたいことは、色づかいです。」と記述を続け、自身の表現を向上させるためにこの作品の色づかいから積極的に学び取ろうとしていることが分かった。

下線cでは、これまでの生徒Cの生活経験の中でどのような色や形に惹かれることがあったのかについて質問した。生徒Cは、興味をもっているアニメの色づかいについて述べ、そこにも色の統一感があることに気付いた。

生徒Cは、対話による鑑賞を通して、作品に対する見方・考え方を言語化しながら深めると共にこれからの自身の表現にどう生かしていくかについて考えることができた。

#### 4. 1年生生徒Dと池田との対話(上村松園『牡丹雪』)

生徒Dは、上村松園『牡丹雪』を鑑賞する作品として選択した。今回の対話による鑑賞の研究協力に意欲は示してはいたが、用意された絵画の中には、強く惹かれる表現はなかったようである。しかしながら、生徒の母が日本画に興味があり展覧会で一緒に鑑賞した経験を想起したことや淡い色づかいに美しさを感じたことなどが選択の理由となった。

感想やこちらの問い掛けに対する返答は、やや反応が少なめだったように思われる。対話による鑑賞を行う上で、生徒の考えを引き出すためにはどのような質問が有効か考えさせられる実践となった。

以下は、生徒Dと池田との対話内容である。

**生徒D**女の人が着物を持ち上げて歩きづらそうにしているように見えて、道が雪で埋まっていると思いました。雪が静かに降っているように見えました。(下線d)

**池田**前の女性が着物を持って歩きづらそうにしているところから、描かれていない足元の積雪を想像した

というところ、なるほどと思いました。雪も静かに降っているようですね。私が気になったのは、2人の女性が対照的な描かれ方をしているところです。前の女性は、綺麗な模様の着物が目立ち、傘には雪が積もっているようです。それに対して後ろの女性は、地味な着物をして、目立たぬように顔を隠すように布を頭から被っています。(隠れたいのか、それとも単純に寒いからマフラーがわりなのか? 地味な着物はただの上着なのか?) 傘の白い部分は模様なのか雪なのか。いずれにしても前の女性のように積もっていません。どのような目的があって2人が雪の降る中、一緒に歩いているのか? ととても気になる作品です。

**生徒D** 前にいる女性が後ろにいる女性より上の人だから後ろの女性は目立たないように顔を隠すように布を羽織っているのだと思いました。前の女性の着物が派手なのはそのせいだと思います。

**池田** なるほど、立場の違いがあり服装が違うのかもかもしれません。どんな理由があるのかわかりませんが、手を袖で覆いたくなるくらい寒い雪の日に2人が歩いている。余白は多いですが、その分、雪の状況やその中を歩く女性のいる空間を想像させるような作品です。はっきりとした線や色合いから女性の精神的な美しさや強さが感じられるようでもあります。

この2人が話していることや考えていることをセリフに表すとしたら、どんな言葉を入れますか?

**生徒D** 女性が足元ばかり気にしているようで「足が寒いな。」とか「あるきにくいな。」とか考えているんじゃないかと思いました。二人の女性は背を向けているようで、話しているようには見えませんでした。(下線e) 後ろの女性の横にもうひとり人がいるように見え、その人と話しているんじゃないかと思いました。(下線f)

**池田** 後ろの女性の横にもう1人いるんじゃないかという発想がとても面白いですね。私も何で後ろの方向を見ているのだろうと思っていましたが、2人だけじゃないという考えにはっとさせられました。視線の先に誰かがいるのかもかもしれません。Dさんは、描かれた情報からその周囲に広がる世界を想像して見たり感じたりするよい鑑賞の仕方をしているなと思います。また、上村松園の表現が、鑑賞する人の想像を刺激している部分もあるのだろうと思います。大きな余白・2人の体勢・しぐさ・視線など…が鑑賞者に自然と働きかけてくるようにも思われます。

そう言えば、Dさんは今回の鑑賞でこの絵を選んだわけですが、上村松園の牡丹雪のどのようなところに1番惹かれたのでしょうか?

**生徒D** (美術室の中に置かれた他の作品の) 1番や2番みたいにごちゃごちゃした絵はあまり好きじゃないし、抽象画などもあまり惹かれるようなものがなく、母が日本画が好きだったことを思い出し、展覧会でよく見せてもらっていたのと、色合いが淡い色できれいだったのでこの絵にしました。

#### <生徒Dとの対話の分析と考察>

対話の後半で気付いたことではあるが、下線d及び下線fの記述から、生徒Dのこの作品に対する関心事は、「この絵の周りに広がる情景」と言える。こちらの様々な質問に対して返答はするものの、一問一答のようであり話が広がっていかないのは、教師が生徒Dの関心に気付くことが遅くなったことが原因のように思われる。生徒の感じ方を一旦受け止めたつもりだが、二人の関係性やストーリーなどの話題に変えてしまったことが反省点である。生徒の関心に合わせてもっと深掘りするように質問内容を吟味すればよかった。

生徒Dが2人の人物の関係について注目しなかったことについては、下線eにあるように「2人の女性は背を向けている」と捉えていることが理由として挙げられる。しかし、この捉えには誤りがある。後ろの女性は、傘の柄を持つ両腕が前に向いていることから背を向けているのではなく、顔だけ後ろを向いていることが分かる。

#### <ICTを用いた対話による鑑賞の成果と課題>

日頃の美術科の授業の中では、多数の生徒と教師1人が対話をしたり、生徒同士で対話をしたりする鑑賞の方法が一般的である。その場合、大勢の多様な見方・考え方を知る学びにはなり得るが、個別の生徒の鑑賞活動は、浅いものになりがちである。

本実践では、一つの作品を生徒と教師の間に据え、じっくりと時間をかけて対話をしながら作品の鑑賞を行った。そうすることで、生徒1人では到達できないであろう段階まで深く作品を理解したり、自身のこれからの表現に活かそうとしたりする主体的な生徒の姿につながった。これは、大きな成果であると言える。また、ICTを用いて自身の考えを入力することは、対面でのレスポンスの速さを求められる対話と違い、時間をかけて自身の考えを言語化したり、相手の考えへの返答を考えたりすることのできるメリットがある。



課題としては、対話する教師の力量が問われることだと考える。本実践では、2人の生徒と対話して鑑賞したが、生徒の感じ方を丁寧に捉えると共に深い鑑賞につなげるための適切な教師の質問の仕方が重要であると感じた。

### 5. 1年生生徒Eと藤本との対話（マティス『ひょうたんのある静物』）

生徒E①一定の角度から見ると立体のようになって見えたりするなと感じました。(下線g)

②赤い器みたいなのは色々なものに見えるなと思いました。(下線h)

藤本①Eさんが、一定の角度から見ると立体に見えると言ったものがどれか、探してみました。水差しや平皿がそう見えます。

立体に見えると言う感覚と、マティスが部屋で本当に物を見ていたんだろうなという感じです。どんな部屋でしょうね。

しかし他のものは平面的で現実感がなく、立体的なものも混ざって置かれているので不思議な印象を感じました。

赤い物は私も器だと思いましたが、糸尻（器の下の出っ張り）が小さいですね。そう言えば、他の物同士の大きさも好きように変えているように見えます。



図5 マティス『ひょうたんのある静物』1916

#### <生徒Eとの対話①の分析と考察>

下線gの通り、生徒Eは観察された造形要素から対話を開始した。本論冒頭で説明されたように、本実践が目指すことは、造形要素の詳細な観察に留まらず、作品鑑賞を通じた他者との出会いである。しかし絵の造形要素は共通の話題であり、そこから対話を開始することは生徒にとって自然なことであったと思われる。藤本は最初の返答として、メールによる対話では一つの作品を同時に同じ環境で見ることができないことをふまえ、同作品を見ていることを互いに実感し、生徒Eに寄り添う意志を表現しようとして①の最初の言葉を掛けた。

それに続く生徒Eの「立体」という言葉に対しては、どのように反応すべきか検討が必要だった。まず中学生は写実的表現に関心を抱くことがしばしばある。だが生徒Eが「一定の角度から見ると」という表現をしたことから推測するに、単に写実的表現が成功しているモチーフに注目し他の部分を無視しているのではなく、絵の全体を視界に入れた時には写実的表現と平面的表現が入り混じっていると感じ取っているからではないかと思われた。その上で生徒Eは立体的に表現されたものに焦点を当てている。恐らく生徒は、立体的表現と平面的表現が入り混じる独特な視覚体験をもたらすこの絵画の中で、実際の視覚に近く確かな手触りのある写実的表現に注目したのだろう。藤本は、主体的な視線を絵画に向ける生徒の態度に寄り添い、生徒との関わりを深めたいと考えた。立体的表現は現実でものを見た時の見え方を元に行っているであろうから、立体的で写実的な表現に注目する生徒の視線を、制作者であるマティスが現実でものを見ている視線に重ね合わせるような言葉を返した。その上でこの絵画に平面的表現と立体的表現が混在しているように見えると述べて生徒の見方に賛同を示し、さらにこの話題を続けて欲しいという意味を込めて問いかけの形で文を結んだ。マティスの絵画を鑑賞する時、画家と現実のモチーフの関係を想像することは常に有効な方法であるとは言えない。特にマティスは写実性よりも平面のタブローの上での造形的表現を追求した画家として知られている。とはいえここでは現実的で想像しやすい要素を想起させ、生徒の態度を肯定することを優先した。

さらに下線hのように生徒からは赤い器に関して言及があった。正体不明のモチーフに疑問を抱くのは、前半で立体という現実的に実感できる要素に注目していたように、物事を明確に把握したいという心理が働いたからだと推測できる。前段落で述べたように、藤本は生徒がこの絵画の本質を平面的表現と立体的表現の混在として直観していると考えていたので、ここでは赤い器が何であるかという議論に乗るよりも、むしろ

ろマティスが平面上で任意にモチーフの大きさを操作しているように見えると応じるに留めた。

**生徒E②**ホットプレートや材料が置いてあったのでこれから作る予定だと思いました。ひょうたんから生えている謎の何かがコンセントみたいだったので気になりました。(下線i)

一見ただの絵のように見えるけど、影がしっかりついていて作者のこだわり(下線j)のようなものがあると思いました。

**藤本②**これから料理をするのかもしれませんがね。

ひょうたんと銀色のものの間の黒い線をじっくり観察してみました。ひょうたんから伸びている茎のようにも見えます。

Eさんの言う通り、描き方への作者のこだわりが見える絵なので、写實的に描くよりも、優先したい意図があったのだと思います。どんな意図でしょうね。

私は「なぜこういう風に描いたんだろう？」と思った時、手でその部分を隠して見たりします。この黒い線の正体ははっきりしませんが、これがないと右側の画面のモノがバラバラに見えるので、まとまり感を出すために長い線で2つのモノをつないだのかなと思いました。

### <生徒Eとの対話②の分析と考察>

下線iで生徒はこの絵を料理する場面だと表現し、蓋付きの食器を「ホットプレート」、ひょうたんから伸びた黒い線を「コンセント」と述べた。このことは先の対話①で藤本が具体的な情景のイメージを尋ねたことへの反応と考えられ、さらに対話①の反復のようにも見えるが、絵の中の時代や文化を生徒自身の生活の範囲に結び付けて理解しようとしている点では、藤本と生徒自身とが接近したとも言える。

さらに下線jで生徒はしっかりと絵画に向き合い、画家のこだわりについて思いを巡らしている。藤本はこの態度を励ましたと考え、生徒が取り上げた物に自分も注目したことを伝えた。さらに「作者のこだわり」が何であるか生徒自身の言葉で聞きたいと考え、そのための問いかけを模索したが、ここで有効な問いを思い付くことができなかつた。そこで漠然とした問いを投げるよりも自分自身の印象を具体的に語ることにした。そのような姿勢をこちらが見せることで、生徒からも具体的な言葉が引き出せるのではないかと考えたからである。一方で藤本の述べた内容は平面上の「構成」という話題であり、生徒Eが平面と立体の表現に関心を示したとは言え、生徒の興味の範囲外であった可能性があり、反省すべき点である。

**生徒E③**背景が黒とグレーに分かれていて、不思議だなと思いました。壺だけ特に丁寧に影や色をつけていたので何かあるのかなと思いました。(下線k)

**生徒E④**この絵の皿の上に、ウイナーみたいなものとひょうたんのようなもの、丸い緑色のフルーツのようものがあって不思議だなと思いました。また、丸いフルーツのようものからも暗い線が生えているなと思いました。

### <生徒Eによる語り③、④の分析と考察>

対話③、④は事前に定めた実践期間を終えて二度目に長岡附属中に訪問した日に生徒から送られたものであるが、それ以前のやり取りの結果として取り上げる。

藤本是对話②において具体的な自分の印象を伝えることで生徒もまた自分自身の言葉を語ってくれるのではないかと予想し、画面の構成について自分の印象を述べた。対話③、④においては具体的な物への観察だけではなく印象について述べた言葉があり、対話②での意図が伝わったと言えるかもしれない。生徒Eとの対話において生徒の語りた内容を十分に察し、言葉を引き出すためには、より早い段階から自分自身の感じたことを語り、生徒にも同じように自分自身の言葉を語って良いのだという安心感を与えることが必要だったのでないだろうか。そしてまた生徒とのつながりが実感できるまでは、生徒が扱うことのできる話題に留まる方が良かったとも考えられる。

さらに対話③、④について注目されるのは、これら具体的な物への言及の中で「不思議だなと思った」という表現と下線k「何かあるのかな」という表現の間の差異である。前者は「なぜそのように描かれているのか」「それは何か」というモノへの疑問の表明であり、後者は「画家はなぜそれをそのように描くことに関心を抱いたのか」という一人の人間に対する疑問である。これは藤本が画家という存在を話題にしたことによる意図せぬ結果であった。これに関して、美術鑑賞を通した対話はまず対話の相手とのつながりが第一であると言えようが、生徒Eとの対話の場合には、仲立ちとしての制作者の存在が助けになったと言える。

遠く離れた場所で互いに未知の相手と対話を試みている状況で、第三者としての制作者に協動的に言及することが、結果として生徒Eとの間の緊張をやわらげたのだと考えられる。

## 6. 2年生生徒Fと藤本との対話（植村松園『牡丹雪』）

生徒F①色味がすごくきれいだ(下線 l)と思った。後ろの人の②かんざしのかざり?が細かい(下線 m)と思った。

藤本①色味に注目して見ると、前の人の薄緑の着物や白々とした傘の色から、雪の降る日のひんやりした空気を私は感じます。後ろの人の薄青い傘や着物の色もそうですね。

色の塗り方の平淡さも、冬の空気らしいなと思いました。

後ろの人のかんざしを描くことで、防寒用の頭巾をするような寒い日にも着飾っている余裕を感じます。

それと、ずいぶん上に余白がある絵だなと思いました。

生徒F②上が空いているのは雪が降っているのを強調するためかな(下線 n)と思いました。それと後ろの人より前の人のほうが薄着だな(下線 o)と思いました。ちょっと着飾る余裕があるのかなと感じました。

藤本②人や着物を描くだけでなく、雪が降っている様子ごと感じ取れるように上の余白が空いているのですね。

前の人が頭巾を被っていないのは、華やかな簪が見えるようにだったり、髪型が崩れないようにでしょうね。おしゃれに装いたいから寒さも余裕で堪えられるのかもしれないし、身を縮こまらせているので本当はやっぱり寒いのでしょうか。

寒くても我慢できるような楽しみな用事があるか、我慢強い性格なのかもしれませんね。

### <生徒Fとの対話①, ②の分析と考察>

下線 l, mから、生徒Fの関心が色味と服装であることが分かる。藤本はこの話題を受け自分の印象を語ることで生徒Fもさらに自分の関心を語ってくれるのではないかと予想し、服装と色彩表現に描かれた冬の情景を結び付けながら発言を返した。こちらから「着飾る余裕」という見方を示すと、生徒は下線 oの通り「前の人の方が薄着だな」と応じた。またこちらからの着眼点として上部の大きな余白に着目すると、下線 nの通り生徒は自らの解釈で余白の意味を説明してくれたため、こちらも賛同の意を返した。以上のように生徒Fとの間には互いに話題を共有する準備があるという実感があつた。一方で生徒が下線 lで注目していた色味について、こちらの言葉への反応はなく、再び生徒からこの話題が出たのは対話③においてであった。

生徒F③現代でも、寒い中短いスカートを履く人もいるので、現代にも通じるところがあるかも知れません。(下線 p)冬っぽい寒色で塗っているので、寒い空気が表現できている(下線 q)と思います。

藤本③寒色によって寒さを感じられますね。人の表情や言葉ではなく、色や草で表現されていますね。冬でもミニスカートを履く人と重ね合わせると、前の女性が寒くてもおしゃれのために頭巾を被っていないことに親しみが湧きますね。美しい色合いの絵ですが、現代の私達と共通するような気持ちがあつたのかも知れませんね。

生徒F④その前の人の着物の模様が、冬らしい色合いできれいだ(下線 r)と思った。色味も後ろの人より派手で、身分も高いのかなと思った。でも猫背になっているので寒さは感じているのかなと思った。

### <生徒Fとの対話③, ④の分析と考察>

下線 pでは寒さと服装を結び付ける話題を生徒が展開し、現代という時間の概念を引き入れた。さらに生徒は下線 qで最初に提示された色味に言及し、それ以前から続いている寒さの表現という話題に結び付けて表現した。藤本は会話が順調に進んでいると考えたが、下線 rでは再び①の下線 lと同じ色合いの「きれいな」に話題が戻る。藤本は話題を広げようと冬らしさと色味の関連を話題にしたが、生徒自身は色味を「きれい」と感じた自分の心情自体を語りたかったのかもしれない。対話②で生徒が色味の話題を保留した理由が、自分の語りたい内容とこちらの文脈が違うことを見て取り躊躇したからだだとすれば、この点はこちらの反省すべき点である。

意味や内容の情報を構築する鑑賞をする場合「きれい」という心情を話題として他者と対話する意味を見出すことは難しい。だが本実践のように他者を尊重し関わり合うことをまず目的とする場合には看過できない重要な意味を持っていると言えるだろう。「きれい」と語る他者の声に耳を傾けることは、他者をその人

自身の喜びを持つ主体として受け入れることであり、他者の心が芸術にふれて感動した経験を分かち合うことだからである。

### 7. 生徒との対面による活動の振り返り

メール交換での実践が終了した8月18日(金)、佐藤と藤本が再び長岡附属中を往訪し、対面で30分ほど参加生徒と振り返りの時間を設けたので、藤本から報告する(池田は都合により欠席)。メールでの対話と普通の鑑賞との違いとして、何日か分けて何度も絵を見たこと、さらにその間にペア相手からの言葉を得たことなどが挙げられた。生徒からは概ね好意的な感想が寄せられたが、一方で体験を言語化するのが難しい様子で、自分が見ていなかったところを見られてそれについて掘り下げて見られる、自分にない考えが取り入れられた等の感想が得られた。この振り返りで言語化された感想については、1章の佐藤による生徒Aとの対話④の分析を参考にすれば、対話の価値と目的を「個人の知識・能力を伸ばすため」に還元していると言える。一方ここで言語化されなかったような、複数回のやり取りをする中で、互いに配慮しながら関係を構築しようと苦心した体験は、それぞれのペアでの分析と考察の中で述べてきた通りである。言語化されていないものの、対話を行う際のこの独特の緊張は、最後の振り返りで、生徒が一言ずつモンドリアンの《青いファサード》について述べようとした時にも観察できた。生徒が「〇〇に見えると言う人もいる…」と互いの言葉をくり返す姿は、自分の意見を述べる際にも先の発言者を尊重したいという意志の表れだと言える。そしてまたこのような意見のくり返しは、メール交換においても見られたものである。つまり本実践におけるメールでの1対1の対話においては、互いの顔が見える少人数での対話に近い互いに配慮する心理状態が自然と生まれたと言える。むしろ遠隔で隔日の実践であったことで対話の緊張がやわらぎ言葉選びに余裕が出来るとも考えられるが、この点について言及はなかった。これは体験への感想であり、知識・能力に関する話題ではないので、知識・能力に関して言語化することに慣れている生徒からの言葉がなかったことも理解できる。

### Ⅲ. おわりに

最後に、今回の計6ペアでの実践を通して気づいたことを附記しておきたい。

一つは、自分が気に入った絵画作品を鑑賞することの大切さの再確認である。一般の鑑賞授業では、教師が選んだ一点または数点の作品を対象に鑑賞活動が行われる。このことは、鑑賞授業における主体性を損なう大きな要因であると思われる。与えられた作品を鑑賞することになった時点で、作品は観察対象へと変わる。生徒と作品には内的な関係の紐帯がないためである。作品を外的なものとしてその特徴や性質を探ることとなり、自分との関係で作品を見て探究する道が閉ざされてしまう。一方、気に入った作品を選ぶという場合は、その時点で作品と自分が関係付けられて、自ずとその関係からの鑑賞活動となる。自分が選んだ作品は自分にとっての特別な作品であるとするところから、初めて深い鑑賞が生まれてくる。この特別な作品との関係が、相手との対話を真摯で動機付けられた意欲あるものにしてくれる。ただそのためには、積極的に選びたいと思うような作品が選択肢の中に含まれていなければならない。これは年齢要因もあるかもしれないが、より時代性が大きいと感じた。今日の中学生の感性や好みは、以前の中学生の感性や好みとは異なっていると感じた。末尾に今回の鑑賞作品リストを上げたので参考にされたい。以前は印象派の絵が多く好まれていたが、それを選んだ生徒はいなかった。

もう一つは、生徒との対話から、むしろ教師自身の考えや心理があぶり出されるということである。それは、対話の中でよりも、後で対話の記録を見返す時に強く意識化される。対話の中で何に注意が向いていたか、何を感じ考え、そこで何を意図したかが、明瞭に浮き上がってくる。これは、今回の対話メールで行ったことの利点であった。対話を見返した生徒は、やはり同じ体験をしたかもしれない。

これらのことは、今後の鑑賞教育や鑑賞対話の研究テーマに繋がる事柄だと感じた。

#### Ⅳ. 活動記録

- (1) 【長岡中での生徒への告知と参加者募集】 2022年7月19日(火)部活動時間。池田が図6を配布し、活動の概要を説明した後、参加生徒6名を募集した。参加人数は、3人の教員と学生で受け持った時、1日で生徒全員に十分な時間を充ててメッセージを返すことのできる人数を設定した。
- (2) 【長岡中往訪】 2022年8月1日(月)10時30分-11時。佐藤、藤本が、池田の指導中の長岡中美術部を訪れ、複製画を展示した(持参した作品は下記参照)。参加しない生徒も含めた美術部員全員と、教員・学生が自由に会話しながら作品を見て回る活動を行った。またその場でペアが顔合わせを行った。
- (3) 【メール交換による実践】 2022年8月4日(木)5日(金)、8日(月)、9日(火)。各日は美術部の活動日であり、生徒は部活中に学校のChromebookでスライドを入力を行う。<sup>3)</sup>またその日部活に参加しなかった生徒は、私物の端末から可能であれば入力を行うものとした。
- (4) 【長岡中往訪】 2022年8月18日(木)10時30分-11時10分。参加生徒との振り返りを行った。

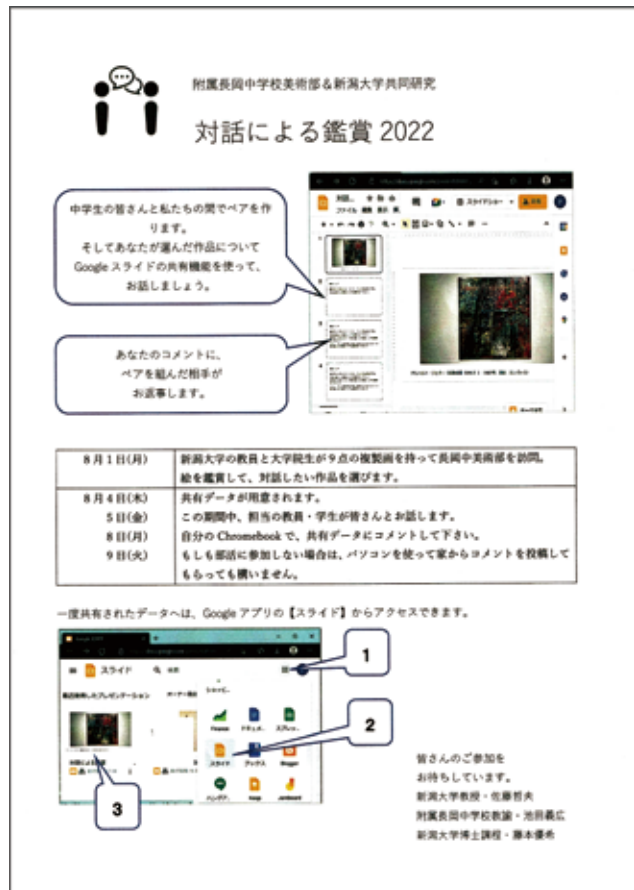


図6 活動説明のための配布資料

#### ●用意した複製画の作品一覧

- マーク・ロスコ 『No.14』 "No.14", 1951  
 アンリ・マティス 『ひょうたんのある静物』 "Nature morte aux coloquintes", 1916  
 メアリー・カサット 『青い肘掛け椅子の少女』 "Little Girl in a Blue Armchair", 1878  
 レンブラント ファン レイン 『夜警』 "De Nachtwacht", 1642  
 クリムト 『死と生』 "Tod und Leben", 1910-1915  
 上村松園 『牡丹雪』 1944  
 ピエト・モンドリアン 『構成番号VI;構成9;青いファサード』 "Composition No.VI, Composition 9 (Blue Façade)", 1914  
 フィンセント・ファン・ゴッホ 『二匹の蝶』 "Tuin met vlinders", 1889  
 バスキア 『ペリシテ人』 "Philistines", 1982

#### 註

- 1) 佐藤哲夫, 「中学生ペアの絵画鑑賞における「対話」の分析と考察」, 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 12(2) 215-220 2020年3月  
 2) 図1, 3, 4, 5は、今回鑑賞用に購入した複製画商品画像  
 図2の引用先

<https://soultrainc.myblog.de/soultrainc/art/6933387/SUMMERTIME-Jean-Michel-Basquiat-das-Strahlenkind>

- 3) 本実践は、当初メールを交換して対話することを想定していた。しかし附属中生と新潟大学の教員・学生とが直接メールを交換することはセキュリティ上できないことが分かり、Googleスライドのデータを共有し共同編集するという形での対話を行うことにした。遠隔通信によって時間をおきながらメッセージが交換される点で、本来想定していた「メール交換」と遜色ない活動ができるものと判断した。執筆上の表現としても、活動の目的のニュアンスを伝えやすいという理由で、「メール交換による対話」という語を採用している。

\* 本研究はJSPS科研費(17K04752)の助成を受けたものです。